序　章

「修行抄の成り立ち」について、また、「今でも私たちがこの修行抄をお誦えするわけ」

修行抄の成り立ち（縁由）を説明すれば、それがそのまま、私たちが修行抄をお唱えする理由としてはっきりしてまいりますので、お祖師様が修行抄をお書きになったわけを順を追って説明いたししましょう。

まず、修行抄はお祖師様が文永十年五月に、佐渡、一の 谷（さわ） においてご撰述された御書で、末尾に日付が文永十年（癸酉　西暦一二七三年）五月と付けられています。

そのご撰述の目的は龍口、佐渡のご法難がなぜ起こったのか、その由来を述べられ、動揺する門下の御弟子、檀那（ご信者）のご信心を督励されたものです。

御法難と御弟子やご信者の動揺

お祖師様がご法難に値われるのをみて、また、実際に自分自身に難が及んで、牢に入れられたり、領地を召し上げられたり、職業を失うという事態になって中には退転してしまった御弟子やご信者が多くありました。　かまくら（鎌倉）にも 御勘気（ごかんき）の時、千が九百九十九人は 堕（おち）て 候（そうろう）人人云々（新尼御前御返事　昭定 869 頁【昭定とは日蓮宗発行の昭和定本】）と仰せのように、踏みとどまって残るものは少なく、退転するものがほとんどというありさまでした。ですから、龍口、佐渡のご法難によって、お祖師様を中心とする教団は少なくとも組織の上では壊滅状態になったといっても過言ではありません。頭領であるお祖師様は佐渡に島流し、御弟子と信者の多くもそれぞれ法難にあったのです。　このような法難にあったとき、また、イザというとき、本心はどんな人か、そのご信心はどんな程度かがよく分かります。これには何種類かのタイプがあります。　第一は、決して退転しない人です。今までの法華経のご信心を貫き、お祖師様に対する帰依を失わず、どんな危害が自分自身に及んでも退転しない人です。　第二は退転者です。一応、なにも起こらない平和なときにはご信心に一生懸命なようであっても、一朝、事がおき、自分自身がそれによって危険な目に遭うというとき、ご信心をやめ、師を捨てるような人です。利害、得失だけが行動の基準で、いとも簡単に大事なご信心を平気で踏みにじる人です。　第三は、コウモリのように常にどちらが強そうか、様子を見て、こちらについたりあちらについたり、昨日の敵は今日の友で終わればよいのですが、その時その時で変節して、今日せっかく味方になったのに、明日はまたもや敵というような類の人です。そして、どちらについているときも、昔から自分はあなたの味方でしたというような顔をしているのです。　第四には、当事者であるのに自分は渦中に入るのを避けて、あたかも評論家のようにあれこれ批評して、高見の見物とばかり無責任な態度をとる人です。これは一応味方であっても宛にならない、敵に背中を見せて逃避するような人で戦線離脱予備群です。　世間で、よく争いや天下を揺るがす大事件が起こったときにも、このような色分けができます。お祖師様の御弟子や当時のご信者の間にも、ご法難によって、このような色分けが自然にできました。ほとんどの人はイザというとき、第二、第三、第四の部類に入ってしまうものでまことに困ったものです。しかし、それが私たち浅ましい人間の常とするところで業といえば業、みな我が身が可愛い、保身を考えるのでそうなりやすいのです。「日蓮が弟子檀那等は憶病にては叶ふべからず」と弱い私たちをお祖師様は叱咤されています。第一の部類、不退転の人は 希（まれ）の中のまた、マレですが、ぜひその中に入りたいものです。そのような人こそ真実の「日蓮が弟子旦那」で、きっと日蓮聖人もおほめくださるでしょう。